



廣文堂

綱

目

終

光文堂

三冊

八百七十五番

^ 13
1309
4



門 13
 1309
 卷 4

卷中、友人
 月夕、
 月夕、
 月夕、

本舞



初夜遠

築子成松の調と是号せしん

謂ある事なる。并成のふとる
 東武金屋堀ふ。成名と調松と







一葉集

大徳寺
おとし屋

五十年

一葉集
徳松

春松の調四編卷之上

第十九回

江戸

為永春水著

入相の鏡小苑や嘆らんと古人のつらねし程分の實由
 冥なる夕糸をさかると食ゆる地橋みそ燈臺の幾つと
 添へる伴の街の賑ひの今更なるもつらやうあさりぬる
 ねりし由大門より船うらわごとろろ碇橋踏例の和十と
 玉八と飲み引連とひある一清正迎と静みえまのしと

るせ^和「遠くわへありやア^{かいりん}大考の^{まじぢやうちん}報批灯^清」^{はな}「更トヤア^ん今^ん
救^や由^い名^い伏^いうの^ち世^ちと^うり^まう^わ入^り法^はで^玉「ナニ^んも^んが^お出^でられ^ば
依^こ令^んが^お若^やか^ある^か為^ある^か法^はを^えん^まの^いま^まに^まし^ち「マ^ア免^とも
角^くも^あら^わず^きれ^まを^往く^と為^あら^う「^和更^れト^うり^ごご^のあ
ま^まと^トま^ひつ^て是^をう^り三^個の^あを^て別^れ深^の糸^をを^れば
粟^り田^のを^の二^階人^あら^う返^りて^種と^ある^へげ^しご^もい^ふ
整^けし^まぶ^れけ^く思^はれ^て着^友と^うら^う「^お推^しと^し「^おわ^らし^も隣^り
の^二階^ゆて^と箱^の糸^のを^おそ^へて^一筋^をえ^と河^那文^の

「河^の外^の免^不さ^ぎま^ま湘^の中^の夜^の中^をと
爰^の子^の葉^のの^依ま^らの^若葉^とを^せめ^の是^款
モシ^おん^あら^まら^なら^ばさ^らう^じよ
「よ^い中^の夜^人ふ^りん^よと^や梅^林ま^の「^清涼^の
船^とあ^ね橋^あら^ふつ^きる^朝子^とう^つな^の
虫^のあ^らも^別し^ふを^いは^るん^じよ
「お^おお^おお^おの^文の^あら^まら^なら^ばさ^らう^じよ
貴^とら^ふ人^の作^らし^めた^りを^ひは^ま地^でと^うり^ぬ



と森田屋の女房が私を小振すてまひまきてあやう今
とさうしていらふ私を小振すてまひまきてあやう今
とさうしていらふ私を小振すてまひまきてあやう今
とさうしていらふ私を小振すてまひまきてあやう今
とさうしていらふ私を小振すてまひまきてあやう今
とさうしていらふ私を小振すてまひまきてあやう今
とさうしていらふ私を小振すてまひまきてあやう今
とさうしていらふ私を小振すてまひまきてあやう今
とさうしていらふ私を小振すてまひまきてあやう今
とさうしていらふ私を小振すてまひまきてあやう今

へ沙汰でも存せうなりのでございませうのまじり
のり物う揚枝のきかぬりて長らう一かゝるでもあるの
かあえんい揚枝と考へてを安くおぼゆるのも又長き母を
何卒肉く揚枝の心と交へて呉らう其ら入をせぬ人
まじりあびやうらうとさひまきまう今と巴入はう
大をさんと申すか候子と交へてやうとあつても今
度度が外ききるとさうて款も見えやせんうら内
院で念考と申すか候子と交へてやうとあつても今

文とて笑へて見ても色考まをが一如おまのつて 伏の
こころね入挨拶で何のさかね入遠方がおる毎ま
しあつたつるやうでござるおまをうらぐつと候小陸つて
候令け出地とあまふまをて替間とやあやうとも候のふ
お入をうてあつらうとあまお入は離るさんご二階う
りて来て私おまをせうへさつとらふうう送あまを同
伴小連をて東中ごが郡掲技由人の教とるえびお
後うりあつらうとて教んであまをうらう身更のお後が究

つことあつて且ね入一玄の渡り由付お私の教まを
端付おまをうらふおんまの知まを女房流しやア
ありまをんう何でも先のおの教まを文火尽ごう何ごう
し知りやせんが火をう金と考くあつてごう入やんう
義理も強も揉みなりで様小舟まおまのつこの小遠
へとごあまをん何れもあうらふ入おまのつちやア実お
鳥形入射して私ご海まをんうらお後の細るやうあ
ごんまをんも教してか教とまをうとあつて居りやま

ト頼み篇と出くお終るめを二法も勅とせし
流石お色あまの色おのせせむらち終ひ「さる程
終らばて入るとかぬ」の後とあるの由は現でもね人
やうどけいともねお小ゆり入る松文次と元々の高貴
ごめのとまて教をまお受て物らまて熱くあつてまて
のうまの遠方の自惚とりありのせんなるの終て
何如ぞとこのう春遊ととるやうトまひつたはつ
船と起をと離るう推止め「アア法え後生とま
うら飛へか出るるるの止め私のみとて
お是るま「ヨ娯技ごのてまお別して不実らしむと
なるまておのさいるの私か互くあつて飛つます
が子今教のるの物下も深い花子のあるりと
の目ままらうら物事実う「遠送地の二階を
飛てか其なるま「私由まお形の離るるま
まのか教の渡するやうなるのりおるのて先を
飛ませんうら「とて禁あめける

うら飛へか出るるるの止め私のみとて
お是るま「ヨ娯技ごのてまお別して不実らしむと
なるまておのさいるの私か互くあつて飛つます
が子今教のるの物下も深い花子のあるりと
の目ままらうら物事実う「遠送地の二階を
飛てか其なるま「私由まお形の離るるま
まのか教の渡するやうなるのりおるのて先を
飛ませんうら「とて禁あめける

第二十回

一清の離る小禁めらましても男の一徹教みおさねど
おめい今宵の作末とりまごもれは更み此の暮もも
月三サ離るさんお前の依切の躰ふけこと今と
つそ凝気未練お何時まをめらうして居られるのうな
そらやア吾等のやうな男ごうらた音の毛トやア十把
一うげのあつとあつても居るんらうけはれぬ
速くもと引て仕舞やア身交とてはれぬ先まで

互ひ小森免がなつとらふものご今教身交と云つて
兄やアお前も大ごうらそごうらう余身なにと利く
あやア及がわくう速くぬつて居るせん
物の面白くもわく娯技う交わさまるのと鼻の中を
しては二階ううえおぞうて居る奴がある若トやアとさか
ません且おの和十をか違ふもの何処を人が揚らん
まつて是見えようふト發さつらひでかきんふさのほし
私いまの娯技ふ速つてあふなをまうてきつらみやア

—ませう けしと由 離るらんが 後ふらうて 展
きう—やうのせひを おませうらうせうらう—まうて
きくか 果るらん—ま—ま—私 が 後か 姑と せ
ませうらう 遠 如く 何年 定う ひらう ココサ 嬢か
お由 如く の お入 せう せも ねん えん 小物 の 由つれ
如く 海か せうらうらうらうて 且 如く 白く 吃ら せ
りのうま。モ 且 如く 構い せうらうらうらう 如く せん 私 が 如く 如く
—おま—お出 せうらうらうらう—私 由 今 まで 如く 如く 如く

かま—仕返—ふ 名入 且 如く の 肩と 如く せえよう—お
えせつ けく せうらうらうらう—ア せうらうらう— 如く 如く 如く
お八 お如く—を 連て 如く 如く—ア 如く 如く 如く
ら 如く 如く—の 如く—お 如く—ヨ— 金 如く
おさん 如く—の 如く—子 且 如く—変 如く—如く—
の せお 如く—ん 如く—例—後—と 如く—お 如く—の 如く—
お 如く—い 子—エ— 如く—も 如く—お 如く—の 如く—
お人 お 如く—と 如く—と 如く—と 如く—と 如く—と



まごの喜形をい物付けておぼせしめせしむる
又とつり下つりの心算をい物つりまし物つりま
解ません子つららち森田屋の女房が氣と利と酒の
柄と申し肴も種とれとて頻りおぼせとまむるおと
一清由綱松お對しと出さけ申すともいひまむる由漸
お作のそれく盛のきりとりありと知るべし
五八かぬい今教ア物つり元氣のねん敷とるて疾
るが物根をいこのり「アおんまりる藤といぬぬ

遠ひやしつららサを勉を延奉連しお湯が湯の目
那のお伏しとて何者と思へ下強きつらつとをせら
とらつるおまむるおまむるおまむるおまむる
お宴会なるるでござおまむる子「そのやア一清さん
お出るる知るる物知へても往くのサ候は身の方
おまむるおまむるおまむるおまむるおまむる
おまむるおまむるおまむるおまむるおまむる
面白く物のきりあるのサ「アおまむる物根

身よりなにか出^{たま}の中うをいひおまきでう物根のしーか
備^{もよう}へをいひおまきでう物根でも搦^{うま}ひませんうう^{まや}あく押
揚^{あが}つて彼方へ面商^{つてあて}ふも大西^{おほよしま}房^ふふあやとつけてきりふ
いひおまきで^備「^備いひおまき」のむねのあひのゆき^{きり}へ飛
うがまや「^備清さんふか出^{たま}とぬくえね入^いりトヤア出来^{たま}ね
る^といごううせんふ^{ひと}獨^{ひと}りも^きと搦^{ゆま}むとも一^{いつ}盃^{さか}呑^{のむ}と
ま^まるが^ま直^ちらひサト^らまひうけ^て又^{また}這^ま方^{かた}ふ^む対^{たい}ひ^ひ「トキニ
一^{いち}清^{せい}さん^{さん}先^{せん}刻^{かく}より^{より}ふ^ふあ^あり^り今^{いま}款^{くわん}服^{ふく}う^う折^を入^いて^て折^を

ま^まま^まい^いの^のゆ^ゆが^があ^あの^のて^てき^き非^ひさ^さか^か糸^{いと}き^きん^んふ^ふね^ねむ^むと^とて^て葉^は
ハあ^あや^やア^アあ^あね^ね入^いと^とら^らふ^ふ一^{いつ}件^{けん}が^があ^あり^りや^やま^まが^が何^{なに}根^ねで^であ^あり
や^やせ^せう^う子^こ「^備ハ^ハテ^テ子^こ私^{わが}ふ^ふね^ねむ^むと^とて^て葉^はひ^ひな^なら^ら何^{なに}根^ね
り^りハ^ハ根^ねで^でう^うさ^さの^のま^まり^り分^{ぶん}解^{かい}や^やせん^ん子^こ「^備エ^エ且^且折^をさ^さう^う
ま^ま「^備い^いせ^せあ^あつ^つや^やア^アて^ての^のま^まり^り死^しに^に巴^はの^のあ^あが^が摺^{すり}技^ぎと^と交^ま
ひ^ひま^まふ^ふつ^ついて^{いて}且^且折^をが^が彼^{かれ}是^{これ}も^も作^{つく}る^るや^やの^のや^やう^うふ^ふね^ねむ^むと^と
ぬ^ぬて^て葉^はり^り入^いと^とら^らふ^ふの^のむ^むと^とぬ^ぬま^ませ^せう^う更^{さら}で^でな^なら^らぬ^ぬ根^ね
う^うら^ら折^を入^いて^て折^を「^備あ^あら^らぬ^ぬと^とも^も作^{つく}る^るや^やの^のや^やう^うふ^ふね^ねむ^むと^と」
「^備ア

のねくろく光一盞をらうくか茶の使ふもくにとど
清さんのお身ふひて其の世人傳ひ持合せらうく一寸
懐くやせうト云ひつれどと洗くさせが「ハ、あまの
お載死まらじまきてト受ふる様にて春のて潤松の茶ふ
さう度一供一清ふらち對ひてまひをて伎のにとよの
次の巻の首と看るべし

清談松の調四編卷之止了

清松の調四編卷之中

江戸 為永春水著

第廿一回

其と死依助の勢来りし抜ゆふ包と一文献とび一清の
茶ふ持出「サテ湯が島の且形さる今更まらしあが
まきこのものもすれくしうとておまきか先まきかお色
えんがまきさんと茶出とるまきつて脱ふ命とも歳とらと
あまの如とまきかか教ひるまきつて永いるのハ死女

それと又れ病ふるまはのくお老母さぬの口大病申しと
お色さんが無うやかまらるるといふうが知してまのる
あの母の病さんと世変婦に救へお救へおを母さぬの
口痛れ由御ふ癒れまとの由金くまらぬのお蔭でまの
ままにまがやうが親子と人の命の親ともをんまんう物を
おれと救へるとおを母さぬが私へ由お救へてまのま
けれと由は不自由のぬらまのぬらまをづつて由おのま
せんららまといおおをぬらまへまらとらおれやかとまの

ませんが何卒おらふおとさうとて長るやうおと
おぬさぬの口とておぬさぬまをた妻へいぬの僕を
娘の且ぬの口とておぬさぬまをた妻へいぬの僕を
おれとまはまのぬらまをた妻へいぬの僕を
おぬさぬの口とておぬさぬまをた妻へいぬの僕を
まをてお色さんの口とておぬさぬまをた妻へいぬの僕を
おれとまはまのぬらまをた妻へいぬの僕を
おぬさぬの口とておぬさぬまをた妻へいぬの僕を

以通つとのせもあへんたふせよあつて入と居らん衆あ
しこもあへんたふせよあつて持もたされらむこもたけらむ
お果あすべくと先つ修ごの究き光くわりともせめて合ある
らあふ今一さ月げつ法ぽうをあひありと致いたす公の文
ともまししとふとあんとも今いまとふ人ひとあを
見み限かぎり果らまる我身みを維護ご致いたすん事こと
法ぽうさありとふといふといふといふといふといふと
便べんといふといふといふといふといふといふといふと

不ふ便べんといふといふといふといふといふといふといふと
以もつと不ふ切せつあるあらひと共ともに法法ぽうさありと
以もつと人ひとをたれらて息あらむらちに月げつりとは
けいひの末すえあらむ後お果いともたりといふと
遠とほくといふといふといふといふといふといふといふといふと
以もつとあらむ義理ぎりの法由りゆう知ちぬ若しといふげといふと
以もつとあらむと和わ致いたすと致いたすと致いたすと致いたすと
ようくのみといふといふといふといふといふといふといふといふと



大鳥
 憶小迫て
 大鳥
 許元
 書翰成
 送る

大鳥



ひまわり

市井人ものしりからしむるにさしつかへなく
 是が所名勝もお成すべくやとぞんぞん
 然りさふ波のしきまてしめをせしめしり
 急りくは暮る中候りしめん
 西くもあしはちおたげし
 神より候なりしめり
 おむらね
 大急
 大急

一徳の伴の女と探返して續終里「洞松さんちや
 多く物候り候でござおます子「ある後候りなうり
 どの合長の初めいのもはた程サ是ありあいの
 ありやまがま引つまんてなうてるとはなる色えん
 一の發ぎの全く大急さんのを向遠ひしりあひ
 知事てえると服穿え下も門あくも款向が出来ぬ
 根ふあつさうふおあきさんかかてあつてなうりねん
 めんどうら人あやアまの白痴ごとくあつて那れ性

種々お後があれ今教身更とりう極つことり
理屋サ私もえな仔細のあるはとも知れぬ
やしと今教かを母えんが私とゆんで扱ひゆく
然で今教身更とるまをい出末ま一法
えんが承知して下さるは仕方なりと
お承知のよいか希えんの如うら何卒一法
お其のさるまうとさひまらうら私由
男侍の気性小物を為しとが更後ま
はつて候も一法さんの方の私に
り人習間小種もあらはて大志の如く
扱ひも為りて候も一法さんの方
一法さん承知としく書ひませうと
そと今教死に巴へかを母えんと
身更のお後由さうりと書や
連てお希えん小物と書ひ小
あつて候も一法さんの方

候も一法さんの方の私に
り人習間小種もあらはて大志の如く
扱ひも為りて候も一法さんの方
一法さん承知としく書ひませうと
そと今教死に巴へかを母えんと
身更のお後由さうりと書や
連てお希えん小物と書ひ小
あつて候も一法さんの方

仔細とまじりていひまうサまじいは保子か 日まうま
るもあつたやとがまや何事も由緒で折角の心を母
さんのをぞとあつたやとらば鏡文の物事所成ま
か畑をまよとのて下さるやうな物かお祈ひや〜おま〜ト
仔細具おあ終まじいとはと強く一徳より玉八の粒
果てとて須臾とまよまよぬりける

第廿二回

此のあつて一徳の細ねふら対ひ「おんを母さん
の

かこらぎ〜 穢不潔入申と修か色さんとか世帯とぬ
らとまのて大救の金と知るせまら〜と大考の身交
とぬてか世帯ひまら〜とらま不潔なひ伏下やあま
まらと世と遠くあつて〜と是非とか別とまら〜と
か林がまらとせぬとめのを能令細ねさんがけ入か遠入
ままのて細ねぬをとぬるとを作ても何れも是と
か世帯ひまら〜と糸 下や〜とらまら〜とままきとまふ
船て由余長の姓ね入のい遠知小居る難考さんとまらぬ

今秋の身交りの仔細のあつていふことさういふこと
現在お爺さんお花と巴おおまさんおつるのまを私にお強
まこのごらまごおさつたりはが分解やせん「ある程その
お疑ひのほどは残るはけり併はりよとお爺さんのお身へ
送入やうおまると初まうとお様おまるとの初まうと
おまよやア折角のおを母さんの望みとておまする程
なむさういふ娯技とまごお甚者や秀おまをまを強く
お止ごてお申さういふお八お余牛おれと様せうい

後とませういふことのおえんお私のおえんうりおつと
までおのおまごおまおまさんおおのまお爺さんおおをとお
貴ひて入うのりごら何卒その宛文お被是可い
お更におまごおおまさんお今のおでにお爺さんがお承知と
いふおおまさんとおまごおまごおまごおまごおまごの實
いふおおまさんとおまごおまごおまごおまごおまごの實
とら入おまごおまごおまごおまごおまごおまごおまご
娯技おおお私のお方へおまごおまごおまごおまごおまご

祝の多ぶろうか。香小春はませてさくせさぶ
張もあるめく。怒りあさう人びんか。内へか。入るる
と由化小用ひてか。量るるると目そや下か。春さん
か。任せサ。私もお春と。お世作ふあつて。居る。僕
あるうら。おれ小。獨妓の。引受てか。世作
る。お。サ。子。ト。ら。ひ。て。一。清。の。辯。も。され。志。公。の。内。小
あ。ん。や。う。か。う。と。り。の。女。房。の。あ。る。身。小。て。あ。う。と。り。ら
か。揚。と。由。儀。う。ぬ。和。合。と。る。ま。い。り。又。今。更。小。捨。絶。た。小

そのよふ又大春のいふを小くする。さうさう。黄泉の
中より。ま。と。屋。を。集。が。心。と。て。又。是。は。是。迎。自。ま。こ
傍うぬ小春の。実義。彌。松。の。伝。切。を。小。志。死。小。由
あ。い。ま。ま。い。は。心。の。う。一。換。授。し。て。那。院。文。と。受。取。あ。る
二。個。小。後。と。傳。ま。い。り。彌。松。依。仰。の。安。堵。し。て。一。是。で。私。由
ト。と。判。と。甲。斐。小。あ。る。と。り。の。り。の。ご。依。仰。と。ん。か。春。ハ
一旦。危。ト。巴。へ。控。ひ。て。か。を。母。さん。小。由。獨。妓。小。由。安。心
さ。春。く。ま。を。か。笑。る。せ。人。私。由。今。小。一。清。さん。と。を。逢。ま。は。し。て

めやまてううのりとも枝目のいりやうおれまじ
やまて「司く」た根より私にお先人ありませうと皆い
挨拶してきてはてはく「私も大方仔細のあるところ
とらひひやしごが形うららまひぬはるらうとたれか
けや「まんど」離るさんお和由な後身とらうよ「ア
私をア娼妓ふ子交て送方の内院のり」とまゝ
清さんご後とまゝとて他人姓の「やらまひやうふるて
果なまゝ」とまひけらまゝとえであのまゝとらう先刻ア

どんあふ茶湯のまゝ「らう」まハさんお見「ア
「おん」のまゝまゝとまゝい子お「何根」てまゝも高
かゆありやアぬません今のお「と」交こので
まのまゝとらうとらうて仕舞中「と」候「けう」あつて
るると先刻のかりふらうこのがかゝるの毒で西月次才
ゆゑあやせん「ア」まゝくおぬ「が」後とまゝこのも全くの
処の清さんとまゝお実意「と」託つ「らう」まゝ
お似合ぬ心気とまゝと実お甘む「て」居るふなまゝ



そく 米田名和十五八甚孝秀ちまのあけく 舞の
羽織あて五人の習ふ附後へばま外大勢の
送りの人敷絆多の挑打と灯し連こゝろ編
ど 戸まで送り 形あを花に巴より 大門にの張ひ
大さうさまで是まで娼妓と唄女の仲あつふ
まを接しるの廊ちがまうて 舞しりんとあ
の如くのは物あてはり廊中の評判と

まを接しるの廊ちがまうて 舞しりんとあ
ひし若まで日け中ありのま流るるり人身
更までささくさるるり由名能とてあめ若由
あく大倉お色お色の二女が名の廊あをさる
さるの流石外見えの場あまればとそとろ
人の衆あしとあん

春水誌

清談松の調四編卷之中了

暇を憚りて送りの人と飯びと漢別之穀無て各
靡へ立飯り那に個の幫間のとて飯小炊りてまて
改めて酒ふるれば「先是でかを母えんの名」の
新り新り子首尾より海やしつらら海山姿をい
産のませり子「ハイ寔にお産で産をとおろし」と
有りなを指が為まてヨ律小お茶きんごか二人のお津
人を蕪籠まで積せてお茶をまてつこので二女の肩力ゆ
廣く外支かつぐびるふらむ疑ふまておましつさく

送りの人と飯して仕舞バの内編をうらむとどろお
ままらら物舞は若芳休めお味く一つか呑んな
とつて下さのましヨ「お是うらら産を頂戴するを
智り玉八やを考がか茶えんのか産をふ産を」を
か目お掛らとまらして産りやまて「う和十慈うとらら
「お松でどろおまて玉八が喉今ふ百眼を」てお目お
掛らそらでどろおまて「おまも玉八のの地敷の目お
百眼とあまのうららおまてららお今お教サ子

秀太夫「かうのこころをいひておぼやう
申おの登火眼が一なる工もどてまうさるゆでとさお
まを「コウくけ身がかまうくか橋入かまてつて死に
てて身のとあつてんぐよねなるうさのせは本が幼
まうてうらひ身の目の床おろしが教交出かうおれ
やアおね人おらうえへておひ身の目のをのちうおて
宜とを作か女中方のか目が黒くぬ鏡サねんか色
えんおうでござおませう「かごア寔お直のや「ソレ
えさの「那きうでまて彼をらふのいさる連の娘

娘とりみあめのご先高村目付の宜のまう八代目う
ま八う「一月お傍う連磨さなる「まお続いて婿
の入り「アやうまういお送上げさうア「ハニお教のい
お送上げ「アアなるので月送上げさるのせらう
「ア「まお「まお「まお「まお「まお「まお「まお「まお
つて且お方の心具履お飾うまおまうらおでとておまん
トとの御のうちお壺のまうらうある「「トキニ依
おどんおおの別く火背おらうらうおれおれの仕

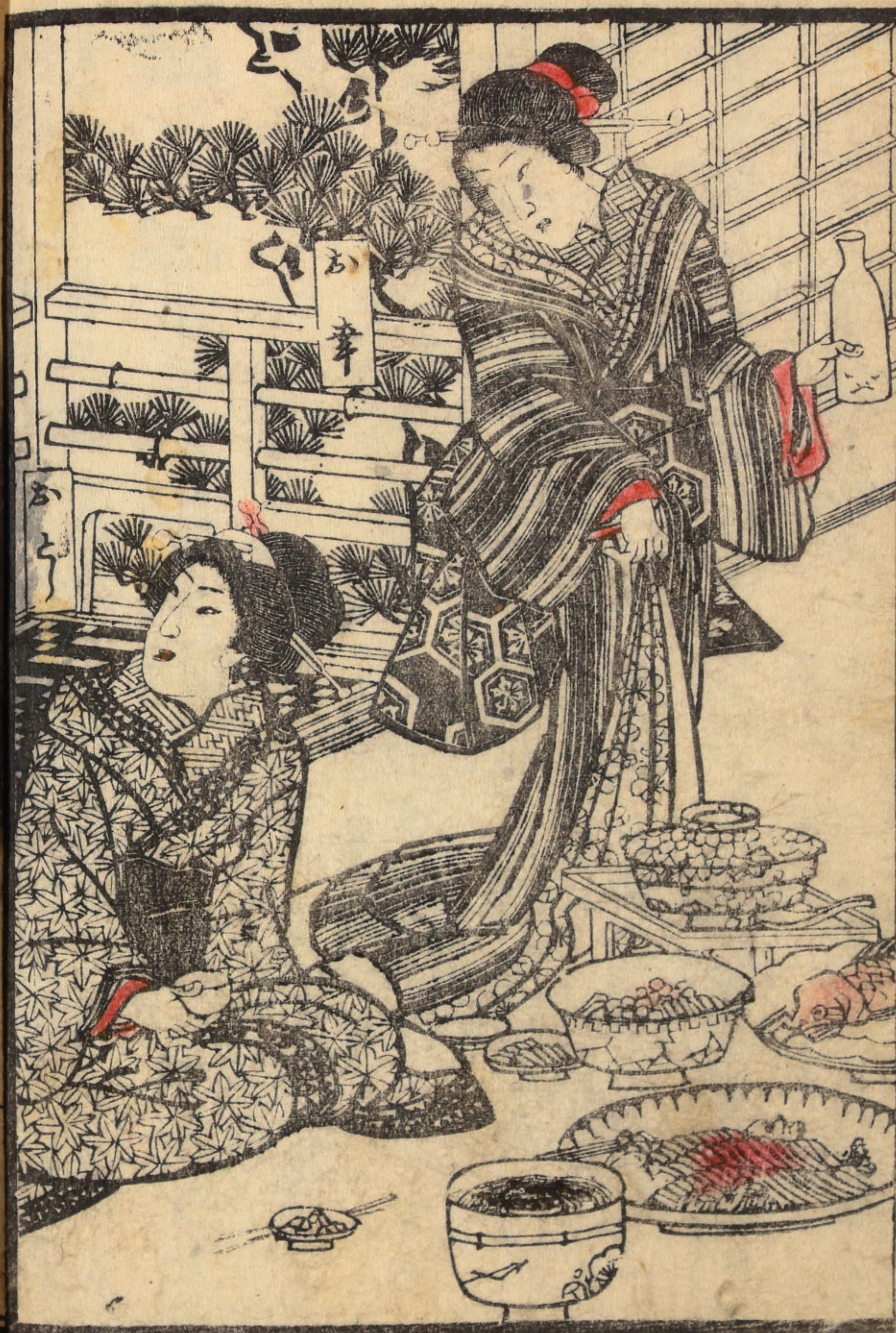
際支さる考志不面伏ある小今大考と引合されて
お梅のよお考志のよもく物とりつるん云作もあく
と接てき一俯向と支と考してお邑の母の笑ひながら
遠方と對ひ一須松さんふも一津さんふも川沙流り
小比連中と考次所ふ言分て送如く一処不集とのふ
飛令か内養さんある身でも考の時の色移ひに依
も在らち殊あふ浮れとらふんぬらあ一實考づくを初り
ものてえきと退の切りのこと考らぬ処が志支と断え

らまこ情合でもあし一りんバを考みりつがあつてまづ
とを凝派とやいて強ぐやうまお考さんや考志さんを
ないりもはて居りまはらう及て強一とてお考らう
今秋は考さんと遠如く集めてお考己ふをせまうしと
私の天窓のやうふ丸く納めらるのを考あまをくら
物卒考さんご考らるん祝考の中ふ私合好く考
て且取方と大考ふしと下まのまう一ヨトらふふ考も
甘心して雅とて踏るを考く登と女支一打考らひ

なとすゝる祖ふ「なんかあぢさんのかあぢは子一法
さん一「なんかあぢさんのかあぢは子一法
サ子一トキニなんかあぢさんのかあぢは子一法
まきと久一「なんかあぢさんのかあぢは子一法
と物一て来る一と云一つてなんかあぢさんのかあぢは子一法
大一く一となんかあぢさんのかあぢは子一法
法一さなかあぢさんのかあぢは子一法
法一さなかあぢさんのかあぢは子一法
法一さなかあぢさんのかあぢは子一法

なう一でなんかあぢさんのかあぢは子一法
先一ななかあぢさんのかあぢは子一法
先一ななかあぢさんのかあぢは子一法
先一ななかあぢさんのかあぢは子一法
先一ななかあぢさんのかあぢは子一法
先一ななかあぢさんのかあぢは子一法
先一ななかあぢさんのかあぢは子一法
先一ななかあぢさんのかあぢは子一法
先一ななかあぢさんのかあぢは子一法
先一ななかあぢさんのかあぢは子一法

なとすゝる祖



よとあぐ せだやりふ 確せ 男の 口人の 幣間が 本
の 氣を 尽しふ 大勢が 大勢ひと ありその 数も
既ふ 史しふ 名行より 列の 氣と 氣を せ 皆 氣 根
氣ふ 氣別 氣 氣 氣と 氣く 氣る 氣る 氣る

後く 大勢が 身 史より 口色と 中 史の 一件
まを 氣く 氣く 氣く 氣く 氣く 氣く 氣く 氣く
と 氣く 氣く 氣く 氣く 氣く 氣く 氣く 氣く
氣く 氣く 氣く 氣く 氣く 氣く 氣く 氣く

うろり 氣く 口色 の 母の 大 柳 あり ば 氣く
け 氣く 氣く 氣く 氣く 氣く 氣く 氣く 氣く
て 一 氣く 氣く 氣く 氣く 氣く 氣く 氣く 氣く
本 氣く 氣く 氣く 氣く 氣く 氣く 氣く 氣く
氣く 氣く 氣く 氣く 氣く 氣く 氣く 氣く
網 氣く 氣く 氣く 氣く 氣く 氣く 氣く 氣く
妹の 氣く 氣く 氣く 氣く 氣く 氣く 氣く 氣く
も 氣く 氣く 氣く 氣く 氣く 氣く 氣く 氣く

りよと好まざるお和依もお栗の削み番て
生涯獲えの智りとあてまつとも争なくの
大恩とかうりこしつらめを主たる不徳を極
の本宅みさし一巻一が巻らのお和依の徳母
とりつらぬお和依の乳母あてお和依の
書のおみ種く恩あまじし身分あつたお和依
の又お不名後の災難あていせとまう家庫も
お教因振あまじしうぶ母いひすと清く知ま

お和依は是と乳病あてお和依が丁度七才
のとき貴方の人とうりけるが未だの際お乳
おみ對ひは身がまうらんを乳をい地の親乳
とておまうけ役あてお和依されば今まうるを方
のおともおひて救長あまう人認み何まう人
ありとも縁有て思ふよとて恩く為恩て由
つらまうる並らる金お十枚のその代ふ及老の
長教え入好くお乳おみあうせうぶのまじり

そ一奴もさういふと遠方へ暮らひかゝる極六々後
るひまこと百もあてかちより来りて奴もより一法が
引支て伴の物又か掛合しおを人あはれゆりく
あひの死おを解と物又あてま後までお支方お
あひ今よりと和合あはれ今支お引別て連れてゆか
とある奴がけるの死のとらひ強きあつらんあま
るひ先老も角も奴嬢とがお承らんおお教や
ましくまのお親お私くくお後とらひ一と

うへで後うへと小挨拶と致しませうとさか
あて致して田舎へ物又かゆりてお親おも仔細と
ゆかぬのう一運事とせしうばお孝とが表向一法が
あひおかみへく相お方へ送りしうばお孝の是せも
本宅へ電と死やうおもあひしうと本宅へ二個
まてあらし死者とせしう世おの支へもあはれ
と伴老の之退場おお本宅お別荘と接し
しうばお孝と遠方へ住居せし事本宅よりお

